

## 卒業論文要旨

題目 物語の系統樹を再現する：記憶に基づく物語伝播を例にして

氏名 伊藤早紀

指導教員 竹澤正哲

### <要旨>

古くから伝わる文化の中には、形を変えながらも今日まで存続しているものが数多く存在する。それらは、人から人へと伝えられてゆく過程で、元となった情報とは異なる内容が付け加えられたり、情報が抜け落ちたりして、その内容が変化していった。このような変化がどのようにして起こったかを明らかにするための方法として、生物学の分野で使用される「進化」の考え方を利用し、文化の進化を系統学的手法によって系統樹に表すという方法がある。この方法は、祖先と子孫の関係を見出すことができるものであれば、生物や文化といった分野を問わずに利用できる思考法であるとされているが、この方法は、文化の変化が無作為に起こることを前提としたものであった。ある文化の進化が無作為でなく、例えば特定の箇所で特定の種類の变化が起きやすいという「バイアス」がはたらくことがあれば、その文化の系統樹を再現することはできない。そして、そのようなことが文化の進化においてよく見られるならば、系統学的手法は文化の進化を明らかにするためにふさわしい方法ではないということになる。そこで本研究では、文化の伝達における「ネガティビティ・バイアス」が系統学的分析に及ぼす影響を検討することとした。ネガティビティ・バイアスとは、ポジティブな情報と比べてネガティブな情報は人の注意を引き、記憶に残りやすいという傾向のことである。実験は、物語形式のシナリオを参加者に記憶させ、その内容を別の参加者に伝えるというものであった。シナリオにはネガティブな出来事、ポジティブな出来事、及びどちらにも解釈できる出来事を盛り込んだところ、3世代にわたる伝達過程の中で、ネガティブな出来事が最もよく記憶され、伝達されていたことがわかった。また、参加者の記憶に基づいて再生されたそれらのシナリオの伝達過程を、系統学的手法を用いて分析したところ、実際の伝達過程とは大きく異なった結果が示された。すなわち、伝達においてネガティビティ・バイアスがはたらいた場合には、系統学的手法によってその伝達過程を正しく解明することはできないということが示された。しかし系統樹を用いた分析は、生物学の分野でも重要であるので、進化において何らかのバイアスがはたらいた場合にも、その歴史的变化を正しく再現できるような系統学的手法を模索する必要がある。